

7. 今夏當内科に入院せる流行性腦炎の數例に就て

東京女子醫學專門學校今村内科教室

大 石 和 子
鶴 岡 章 子
鶴 田 光 子

今夏當内科に入院せる流行性腦炎は僅かに4例であるが、其の悉くが青年層に來り、経過は概して急速で、そのうち3名は死亡せり。腦脊髄液は各例共細胞増多を證明せる他特別の所見を認めず。

8. 筋無力性球麻痺の一例及び其の治療に就いて

東京女子醫學專門學校岡本内科教室

高 土 俊 子

患者は26歳の家婦にして、構音及び咀嚼障碍、嚥下困難を主訴として來り顔貌無表情的にして總べての筋肉は甚だ疲勞し易く殊に口輪筋、咬筋、上肢筋に於て著明なり。

之等の筋肉は電氣變性反應は陰性にして病的肥大、萎縮、運動性刺戟現象を證明せざるも Tolly 氏筋無力性反應陽性、其の他典型的症狀を具備す。

治療法としてワゴステグミン注射、エフェドリン及び鹽化加里内服を試みしにワゴステグミンは著効ありて注射後約十分にして其の効果現れ約4時間持續しその間舌の運動容易となり嚥下困難消失し其の他殆ど常態に復す。しかし其の効果一過性にして漸次増量の要あり。エフェドリン、鹽化加里の効果は認め得ざりき。

9. 小腦橋隅に發生せる聽神經鞘腫の一例

東京女子醫學專門學校病理學教室

本 多 喜 美

東京女子專門學校岡本内科教室

山 田 靜

47歳女性、5年前より左側難聴あり、更に1年前より眩暈及歩行障碍を訴へ、本年4月當岡本内科に入院、眩暈、運動失調、左側全聾、右側難聴、左側顔面知覺麻痺、眼球震盪症、左側角膜反射消失、舌左側の味覺消失等の所見により小腦橋隅腫瘍の診斷にて加療せられしも、來院當初より全身衰弱甚しく遂に降下性肺炎を以て鬼籍に入れり。

剖檢及び鏡檢の結果左側小腦橋隅に發生せる聽神經幹部の腫瘍なる事を確めたり。即ち之は小鶏卵大の、一部囊腫狀を呈せる神經鞘腫なり。小腦橋隅腫瘍の報告例は外國には多きも本邦にては未だ少く高原氏の調査により20餘例に過ぎざるを識る、而も女性例は男性例の約1/3の發生頻度にして本例は稀なる一例なり。

10. 化學的療法を施行せるクルツブ性肺炎に於ける

血液及び尿中クロール量に就て